クローズアップ

丸井織物社長
宮本 徹 氏

生産性向上で効率化推進

北陸産地をリードしてきた軽量高密度織物だが、今年に入り動きが鈍化。各社、生産調整に入っている。北陸最大手の機業である丸井織物の宮本徹社長に話を聞いた。

◇

――好調だった軽量高密度織物が今春以降、動きが止まりました。

昨年末から想定はしていました。実際は3月あたりから状況が悪くなり、現在は各社とも生産調整を続けています。これは日本だけでなく、台湾や韓国、中国なども同様で、東アジア全般に悪い状況です。ファッショントレンドの変化もあり、ピークを過ぎた印象ですね。

――現状を踏まえ、今後の対応は。

一つは〝ポスト高密度織物の開発〟です。糸の加工技術と織り技術を組み合わせ、付加価値要素を強めたものを現在開発中で、ユーザーの反応を見ながら進めていきたいと思います。

ただ一方で、円高の影響が大きく、輸入製品が増え、二次製品価格が上がりません。この中でテキスタイル段階のコスト競争力も重要なポイントになります。

――そのあたりの取り組みで重視されていることは。

やはり工場の効率化です。単価が下がった分、販路開拓し、テキスタイル販売の総面積を広げていかなければなりません。生産性を向上させ、どう利益に結びつけるかが一つの課題です。当社は外注も含め約1200台の織機があります。この生産力の大きさが強みになるよう効率化に取り組んでいきます。

――北陸では東レ合織クラスターや北陸3県クラスターなど連携したモノ作りが進んでいます。

当社も参加しています。商品開発はもちろんですが、うまく連携を取ることでリードタイムを短くできます。結果的に在庫圧縮にもつながりデッドストックを防ぎます。糸加工、テキスタイル、染色など垣根を取り払った連携は今後も増えてくると思います。